鳥取こども学園
学園だより

第52号
2022年12月1日

○発行
社会福祉法人
鳥取こども学園
鳥取市立川町5丁目417番地
電話（0857）22-4206
http://wwwtottorikodomogakuenor.jp/
題字 尾崎悌之助

十字架を共に背負い、未来をひらく

社会福祉法人 鳥取こども学園
園長 藤野謙一

十字架は、イエスが磔（はりつけ）にされたことからキリスト教の象徴です。イエスの苦難、自己犠牲、罪や死に対する勝利、愛の象徴です。我々は皆（子ども、OBとOG、職員、支援者の皆様、関係者の皆様）、一人ひとりが十字架を背負って生きています。

僕はこの十字架の意味に別の解釈を勝手に付け加えています。それは、十字架の縦の線を「歴史の積み重ねのうえに今があり、未来へつながっていく」、横の線を「様々な人とのつながり」です。福祉は、先人たちがその時そのときに福祉対象者（もっとも小さくされた者）に命を捧げてきた歴史があり、その実践や魂（たましい）の延長線上に今がなければならず、過去から未来へつながっていかなければならないと思います。また、福祉は、お互いが「助け、助けられる」関係にあり、助けた人は助けられた人から、助けられた人は助けた人から癒しと力をもらいながら、共に生きていくことだと思います。そして、その歴史的な積み重ねやつながりによる関係性の中に、何か目には見えない大きな力が働いていると思います。

先日、鳥取こども学園の歴史勉強会「学園のルーツを学ぶ会」で、鳥取育児院（現鳥取こども学園）の現場責任者として活動した藤野武夫の日記を読みました。戦後の食糧難のときに玉利という人物が鳥取こども学園の農業をレクチャーしているのが気になり、誰だろう？と調べていると、玉利幸次郎の藤野武夫宛ての感謝の手紙と「甘藷（かんしょ）T・No3について」（玉利幸次郎／日本植物園協会誌第11号別刷／1977年3月）等の文章が出てきました。玉利という人物は、「日本の園芸植物の育ての親」である玉利幸次郎だったのです。その文章には、玉利が終戦時に英国の捕虜となってインドネシアの無人島ガラン島に送られ、日本の食糧難を救うためにガラン島から命がけでサツマイモ（甘藷T・No3）のツルを鳥取に持ち帰り、藤野武夫がその栽培を引き受けて現在の鳥取こども学園の畑で栽培するまでのエピソードが書かれています。玉利は日本への帰還船の中でネズミに食べられないようにそのツルに長いヒモをつけてぶら下げ、食糧や水もわずかであったにもかかわらず、25人の同乗者に「食料難の日本にとって大切な、サツマイモの親となる大切なツルなので、水を分けてほしい」と熱弁し、餓死寸前の人たちから少しずつ一日に茶碗一杯の水をもらいツルを生かしていました。荷物検査のときには検査官に取り上げられないように、わざと空き缶であるように検査官の足元に転がしたり、霜の降りる極寒の中で上着のポケットに入れて体温で寒さを防いだりもしています。

皆さんの中でイモ焼酎を飲まれる方はいますか？市場に出回るイモ焼酎の約90％が黄金千貫（コガネセンガン）というイモを原料としています。このコガネセンガンを親として、スーパーに並んでいるベニアズマ、紅小町等多くの品種のイモが生まれています。このコガネセンガンの親イモが、玉利が持ち帰ったT・No3というイモで、日本で初めてT・No3を栽培したのは、鳥取育児院（現鳥取こども学園）の子どもや職員なのです。戦後の食糧難のとき、鳥取こども学園に行けば食糧があると浮浪児たちが全国から集まってきたという話を聞いたことがありますが、それも納得できます。

これまでの先人たちの「命がけの思い」、現在とこれからの「志を同じくする人とのつながり」を大切にして、十字架を共に背負って未来をひらいていくよう頑張ります。これまでの歴史の中で多くの人のご支援なくして、この学園の運営はなりたっていません。現在も同じです。どうか、同志としてご支援のほどよろしくお願いします。この文章を最後まで読んでいただいた方々と目には見えない天の父なる神様に感謝と祈りを捧げます。

アーメン

興一じっちゃんのつぶやき

理事長
藤野興一　記

マタイによる福音書　11章　28節

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

新約聖書　コリントの信徒への手紙Ⅰ　13章　8節～13節

愛は絶えることがない（決して滅びない）。・・・それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

①1994年12月に「8月9日を世界先住民の国際デーとする」と定められました。私がオーストラリアのタスマニアを訪問した時、大英帝国の海賊キャプテンクックがアボリジニの人たちを銃で撃ちまくったという話を聞いてショックを受けました。ニュージーランドではマオリの人たち、カナダではホークなど100万人の先住民がいるといわれています。その他、私の行ったことがないアメリカのインディアン、北極圏のイヌイット――など。多くの先住民族は、差別され、貧しくされ苦しめられています。

②日本でも、北海道先住民のアイヌの人々は、独自のことばや伝統的な儀式など、豊かな文化を持ち、自然を大切にして生活してきました。また琉球・沖縄の人々など、日本の先住民に関する課題は山積みされています。

また、世界中いたる所で、先住民の人たちによる反差別、心豊かな自然を取り戻す闘いが展開されています。

③鳥取こども学園の職員や入通所の子どもや若者、障がい者たちは、よく闘っていると敬服しています。コロナの状況下で、職員も子どもたちも時に追い詰められ、疲れ果てることもあるでしょう。疲れたら休めばよい。また出直せばよい。退職してもまた帰ってくればよい。鳥取こども学園では一度出会ったら一生の付き合いをすることをモットーにしています。

④職員も保護者も「子どものために頑張らねば」と思えばしんどくなることもあると思いますが、子どもと一緒に考え、子どもと一緒に歩むことを考えれば、むしろワクワクするような喜びを覚え、楽しくなるのではないでしょうか。神様は「私のもとに来なさい休ませてあげよう。」と言って導いて下さいます。子どもを信じ、仲間を信じ、何よりも神様の愛を信じて当事者と共に歩みたいと思うのです。

⑤世界中で、日本のいたる所で豪雨災害や大地震などの大災害が起こっています。自然や心よりも目先のお金や物を大事にして、自分さえよければよいという考え方の愚かさを、先住民の人たちの闘いやコロナウイルスは、警告し、改めるよう迫っています。

まとめにかえて

①2月24日ロシアのプーチン大統領が始めた侵略戦争は、即時停止を求める嵐のような運動の広がりにもかかわらず、益々激しさを加えています。長引く戦争で、生存権さえ脅かされています。何が真実で現にそこで生活している人たちの生活を守るのかを見極め、行動しなければなりません。

②新型コロナウイルスは人間関係をバラバラにします。困難な時にこそ助け合いが必要で、子どもや若者のSNSを駆使した闘いの新しい波が起こっています。子どもたちや当事者と共に、どんな困難に遭遇しても必ず助けてくれる人がいるという体験を積み上げ続けたいと思います。

③誰にも受け止めてもらえず、孤立し絶望した若者による「無差別殺人事件」が起きています。何としても事前に食い止めなければなりません。かつて日本に来た宣教師たちが、口をそろえて「こんなに子どもを大切にする国民を見たことがない」「日本には子どもを家の宝とする素晴らしい子育て文化がある」と言っています。

④この間、緒方貞子さん、中村哲さん、等の偉大な実践家を亡くしました。石井十次、山室軍平、留岡幸助、尾崎信太郎などの先駆的実践家は、その時々の社会情勢のもとで歴史の希望実現へ向けて、目の前にいる生身の人々と共に歩まれた方々です。

緒方貞子や中村哲、石井十次たちに共通するのは、「信仰と高い精神性・聖霊に基づいた現場主義」とでもいうべきものであり、正義と平和のために民衆と共に歩む実践にあります。

⑤私も2022年9月23日で満81才を迎えましたが、当事者の命に寄り添い続け、「子どもの人権を守る最後の砦」としての社会的養護施設にもっと光を！と叫び続け、みなさんと共に、みなさんに学びながら、みなさんの仲間に加わり続けたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

児童養護施設

鳥取こども学園

副園長
田村　千亜紀

学園に居て、ふと「ここは呼吸をしている」と感じることがあります。人、大地、建物、そして流れる時間の一瞬一瞬が強く、しなやかな生命力に満ちているのです。

四季の移ろいのなか年度で区切られる子どもたちの成長はわかりやすく、その変化には目を見張ります。泣きながら登園登校していた子が、次の春には年下の子を励ましながら歩いています。当初は余白の目立った制服も、三年後には早く次を用意しなければと思うようなサイズになります。長く学園で生活してきた子が、自炊の練習を始める頃の感慨深さはひとしおです。そして、そのどの瞬間にも子どもの傍には必ず、一緒に生活し苦楽を共にしている大人の存在があり、命の営みは何層にも何重にもなっています。

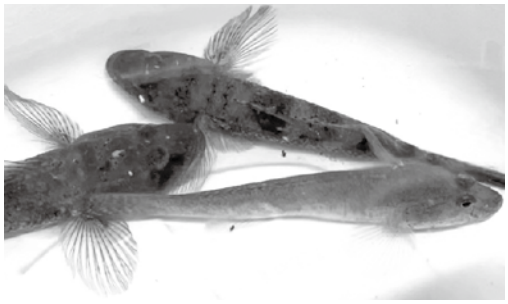
それだけではありません。『学園のルーツを学ぶ会』で辿っている、創立からの歴史に散りばめられた先人たちの熱い思いがあります。こうして『学園だより』を手にして下さっている寄付者の皆様の心ある暖かいまなざしがあります。

新しいものと古いもの、目に見えるものと見えないもの、それらが織りなす絶えることのない鼓動と躍動が私がふと感じる鳥取こども学園の生命力であり原動力に違いないと思っています。

季節の楽しみ

ひまわりホーム
ホーム長　岸本　純子

男の子が生活する『ひまわりホーム』を担当して十数年、「どうしたらそんなことに!?」と驚きの連続なのですが、そんなことでも面白がって付き合ってくれるホームの職員、たくましい子ども達の協力のもと、笑いながら日々の生活を過ごさせてもらっています。気づけば、あっという間に一年が過ぎ去る中で「子ども達と楽しいことをしたいなぁ…」と常に企み、特に季節を楽しむことを大切にしたいと思っています。お花見、海水浴、地蔵盆、焼き芋、クリスマス…と定番だけでも沢山です。「あの時こんなことがあったよなぁ!」「この時は○○ちゃんがこんな事して～」と思い出も積み上がり、時にはアルバムを開いて盛り上がっています。最近では魚獲りブームに火が付き、ホームの裏を流れる袋川で小魚をつかまえ飼育を始めたり、海水浴や川遊びなど水場へ近づくたびに魚を追いかけ楽しみました。先日は岩美の蒲生川までハゼ釣りに行き、初めて釣り上げたハゼを手に「釣れたらやっぱり楽しいなぁ!」と今まで見たことのないホクホクした笑顔を見せてくれ、こちらも嬉しくなりました。秋のイベントとしてハゼ釣りは定番になりそうです。子ども達が大人になった時、季節が巡るたびに思い出せる楽しい思い出が一つでも多く残るよう、子ども達と一緒に全力で楽しめるホームでありたいと思います。



未知を「恐怖」とするか、「新たな探求」とするか

かつらぎの家
ホーム長　鷲見　智明

それぞれの悲しみや苦しみは想像以上に深く、産声も知らない私たちが真に理解できることはないようにも思えます。それでも皆に共通して思えることは、不信が覆い、不安の適切な解消方法を見出せず、押し潰されそうになっていることです。安心感の輪と呼ばれる循環が充分に培われていないのだと思います。この部分を切り取ると、目に見えない愛着を考える上での一つの指標になるのかもしれません。言い訳・嘘・誤魔化し・攻撃的表現等々の表現方法を、不安解消に向けた自分を守る方法として見て取ると、表面上に現れるこれらの行動を単純に数えていくことでも、目には見えない不安の度合いの理解に近づく指標の一つになるのかもしれません。

「プロフェッショナルとは?」の問いに勝手に挑戦してみると、「生活を利用し、心の在り様の理解を深めること」ではないかと今は思います。特定の時間や

空間に寄らない生活の中で、心の動きがあるその瞬間を、「そうだったんだ」という本人を中心とする相互理解に繋げていくことです。支援者側の判断・見立ての是非をも含め、対話を基本とする中で、「ありのままで良いという信用」⇔「生じ得る気持ちを素直に表現することこそが不安解消に繋げられる」という循環が生まれることだと思います。

これらは、その家族にも言えることです。また、支援者自身にも当てはめて考えることが重要です。権利ベースの文化が社会に定着するという基盤が求められています。

児童心理治療施設
鳥取こども学園希望館

フツーからの解放と当たり前の生活

館長　水野壮一

長く学園に居座り続けているので、希望館を巣立った人たち（退所者）から近況報告を受けたり相談に乗ったりする機会が多いです。主な話題は働き方や人付き合いや子育てや家族に関することですが、ここ10年ほど「フツーは○○なのだけど」「フツーに考えたらおかしいかもしれないけど」と前置きするパターンが多いなぁと感じます。フツーとはもちろん「普通」の意ですが、みんなから頻繁に「普通は」「普通に」と聞いているうちに、私の中では「フツー」という何とも引っ掛かりの無いワードイメージに置き換えられていました。

先日ある退所者と話していた時のことです。彼女も会話にフツーを多用し、そこと自分を比べて働き方や人間関係に悩む人でした。ところがそんな彼女が「私は私。フツーを気にしすぎない方が幸せな気持ちになれると気付いたんだ」と言うのです。私は彼女が「フツー」から解放されたことを嬉しく思い、改めて普通とはあくまで尺度・ものさしであって、それに縛られて苦しむものではないと彼女に教えてもらったと感じました。

希望館は子ども一人一人に個性や強みがあること、それが時に（良い意味で）規格外の輝きを放つことを知っています。ですから普通という尺度は承知しつつもそれに束縛されず、子どもと力を合わせてその輝きを希求することは希望館の大切な使命の一つだと考えています。

一方で希望館を語る大切なワードに「当たり前の生活」というものがあります。朝起きたらカーテンを開ける、物を大切に使う、トイレのスリッパは揃える、気持ちの良い挨拶をする、食べ物を粗末にしないなど…小さなことですが、大人も子どももおろそかにしないように意識し、その積み重ねの上に温かく健やかな日常が紡がれていきます。

丁寧に表現すると「当たり前の生活」とは「当たり前にしていきたい生活」であり、そこには祈りや願いが込められています。ですからルールや命令で成り立たせるのではなく、日々の工夫や相互理解によって育まれていくものであるべきです。

当たり前の生活を土台にフツーから解放され自分らしく輝く…子どもたちそれぞれの人生の一助になりたいと願っています。

最後に、実は私自身がフツーに縛られ当たり前の生活が苦手な人間であることを告白しておきます。「水野さん、フツーはこの時間になったらカーテンは閉めるものですよ」と優しい職員に優しく注意をされたり、「フツーその色の組み合わせで服選ぶ？ありえんで」と優しく子どもに教えてもらったりするのですが、特に学びや成長する気配がない自分に、ほんの少しだけ困っています。

復帰して思うこと

ブロック長　山本　奈穂子

「おはよう。起きたの。今日のお外はどんなかな？お空の色が青いです。晴れだよ。晴～れ。」

カーテンを開け、起きたてほやほやの息子にそう話しかけながら、母ちゃんの一日は始まります。

私は四十五歳で出産。産休・育休等含め約二年の休暇期間を経て、四月に希望館女子ブロックに復職させていただきました。

二年の歳月は大きい。私は浦島太郎状態でしたので、子ども達の成長に驚きました。不登校傾向にあった児童も無事に高校生活が送れるようになっており、大

学進学を果たし、アルバイトができるまでになっている子もいました。子どもってすごいなぁ。そう思うと同時に、その力を信じ、引き出し、一緒に歩んで下さった希望館の仲間に対して、ありがとうの気持ちでいっぱいになりました。

私は希望館が大好きです。毎日色々なことが起きて、何でそうなるの?!と思うようなこともたくさんありますが、一つ一つに悩み、考え、もがいてもがいて向かっていく。子どもも大人も一生懸命に生きている。

がんばろう、がんばらなきゃと思わせてくれる場所に戻ってこられたこと、感謝しています。後はやるだけ。できることを、できる限りでがんばりたい。今の私はそう思っています。

伴走者

セラピスト
濱﨑康平

鳥取こども学園希望館教育棟、その2階に東中学校のぞみ分校及び修立小学校分教室があります。分校分教室には、学校に通えなくなった子どもや、学校に馴染めなかった子どもたちが通ってきています。そんな子どもたちに、希望館の職員として「何ができるのか?」を考えた時、その答えは「一人の人間として伴走する」ことしかできないと思っています。きっと子どもたちは、大人が想像する以上の悲しさや苦しさを経験してきたと思いますし、それはその子を見てきた両親、保護者も同じ苦しみを抱えてきたと思います。そうしたことを想像すると、子どもや大人など関係なく、一人の人間として頭が下がる思いです。

学校で傷ついた子どもたちの傷を、癒やせるのもまた学校です。希望館が安全な場所であるように、安心して過ごせるように、一生懸命頑張れるように、希望館は伴走者として、子どもたちとともに走りながら、成長を見守っていきたいと思っています。学校に通うことができなくなった子どもたちの、ほんの一握りの子どもたちとしか、出会うことができません。でもその一握りの子どもたちと出会えたことは、希望館職員として誇りに思います。これからも一期一会を大切に、子どもたちの伴走者であり続けたいと思います。

乳児院　鳥取こども学園乳児部

子どもたちと共に

保育士
中原藍香

コロナ禍での子育て・養育は、子どもたちとできること、楽しめることを模索することの連続です。これからやってくる冬の寒さとあらゆる感染症の心配をよそに、子どもたちは元気に過ごしています。今回は、「成長を感じたこと」をテーマに、3ホームの職員からエピソードを集めましたので、ご紹介します。

【どんぐりホーム】

ある晴れた日のこと、1歳7ヶ月になるA君と手を繋ぎ、散歩にでかけました。手をギュッと握り上手に歩くA君。しばらく歩いていると、一緒に散歩に出ていた男の子と少し距離があいてしまいました。私が「〇〇くんおいでー」と声をかけると、A君も手を振り「おーい」と呼んでくれました。そして、近くにあった花を摘み、私の手を引いて男の子に向かってトテトテ歩いて行き、摘んだ花を「どうぞ」と渡してくれたのです。その後も距離があく度に、私が「おいでー」と声を掛けると、A君も一緒に手をフリフリして男の子を呼んでくれました。ホームではマイペースに過ごし、1人で気ままに遊んでいることが多いA君。お友達を気にかける優しい仕草に心が温かくなりました。そのまま歩いているとお散歩中の犬を発見しました。私が「ワンワンだー」というと、A君も指をさしながら笑顔で「ワンワン」。犬が近くに来るだけで「あっこ」と職員に抱っこを求めていたのにな…としみじみ思い、たくましい姿にとても嬉しくなりました。

（保育士　岩﨑鮎子）

【かりんホーム】

子どもたちの成長には日々、驚きと発見があります。特に0歳児の発達は、寝返りを始めてから歩くようになるまで、できたときの喜びを一緒に感じられることがたくさんあります。私たちは、コロナ禍でマスクを着けて生活しているため、子どもたちに笑った顔や怒った顔、悲しい顔など表情がどれくらい伝わっているのかなと不安に思うことがあります。しかし、0歳児の赤ちゃんも目が合うとニコっと笑ったり、人見知りをして泣いたり、感情表現がしっかり身についています。私たちがマスクを着けていて表情が分かりにくくても、日々の関わりの中で愛着や感情はしっかり育っているのだと感じ、言葉でのやり取りが難しい0歳児との関わりでは、スキンシップや言葉かけの大切さを改めて感じました。

子ども同士のやり取りを見てほっこりする場面もたくさんあります。0歳児を2歳、3歳の子どもたちが「ばぁー」とあやし、みんなでケラケラ笑う姿はとてもかわいらしいです。そのような子ども同士の関わりの中で、楽しいこと、悲しいことなど学んでいくこともたくさんあると思います。私たちとの関わりだけでなく、子ども同士の関わりも大切に見守っていきたいと思います。

（保育士　小谷美幸）

【くるみホーム】

「抱っこして～」「おんぶして～」日々子どもと過ごしている中で毎日のように聞いている言葉です。勤め始めて最初の頃は、抱っこをし続けていると腕が痛くなる事を経験しました。出勤してすぐ子どもと顔を合わせて「おはよう」と声をかけると、子どもが駆け寄って来て抱っこを求めてきます。抱っこをして、子どもがにんまり笑って喜んでくれると、「よし今日も頑張ろう!」と自分の中でエンジンがかかります。

抱っこにも色んなパターンがあります。養育者に甘えて抱っこしてほしい時、ホームの友達と玩具の取り合いをして悲しくなった時、眠くなりグズグズしている時、子どもの目線では見られない物が見たくて抱っこしてほしい時などです。

心理学者のエリクソンが提唱した基本的信頼感は、乳児期における発達課題としたもので、生きていて大丈夫だという信頼感や自己肯定感が、やがて自分が本当の自分であるという感覚を養います。この基本的信頼感を経験する具体的な例のひとつが抱っこです。普段何気なく子どもを抱っこしていますが、あえて大きい事を言うならば、子どもが自分らしさを知って、いずれ社会に羽ばたいていくお手伝いを微力ながらもさせてもらっているのかなと思っています。これからも笑顔を忘れず子どもたちと向き合っていきたいと思います。

（看護師　三中加奈子）

いかがでしたでしょうか。養育には、これと言う正解がなく、子ども一人一人と関わる中で、気づくこと、反省することがたくさんあります。乳児部の強みは職員同士、何でも相談し合える関係が築けていることだと思います。子どもたちのお昼寝中や休憩中、○○ちゃんの可愛かったエピソード・○○くんのこういう時どうすればいい?と自然と子どもの話になります。時には養育に悩むことがあっても、職員同士話すことで、次からはこうしてみよう!と仕事のモチベーションに繋がっています。子どもたちの笑顔や愛おしい姿から私たち職員も日々パワーをもらっています。これからも職員一丸となり、子どもたちと共に成長していきたいと思います。

認定こども園 鳥取みどり園

◎ひよこ組（0歳児）

同じひよこ組の中でも1歳を過ぎた子どもたちは3～5ヶ月の小さな友だちに興味津々。うつぶせ練習をがんばっていると傍に寄って行き同じようにうつぶせになり顔を見合わせ一生懸命、応援をしています。微笑ましい姿にほっこりです。

一緒にごろん♪

◎りす組（1歳児）

「遊びに行こう」と乳児園庭へ誘うと「虫さんいるかな?」と夢中で探し始める子どもたち!

「みてみてー」と見せてくれた手のひらの上にはだんご虫が一匹いました。そのだんご虫に、近くに落ちていたどんぐりを食べさせてあげようとする可愛い姿も見られほっこりしました。

虫さん、み～つけた！

◎うさぎ組（2歳児）

6月に植えた芝が青々と育ち、元気いっぱいに裸足でグラウンドに飛び出した子どもたち。そこには沢山の赤とんぼが遊びにやって来ていました。子どもたちは夢中になって追いかけたり、網で捕まえて遊んだりした後はみんなで赤とんぼの製作を楽しみました。とってもユニークでかわいい赤とんぼがうさぎ組に飛び、みんなを喜ばせてくれています。

赤とんぼがやってきた♪

◎にじ組（3歳児）

写真は教育・保育活動として取り組んでいる「さくら・さくらんぼリトミック」です。

両足首を手で持ち胸を反らせ頭を上げる「かめのポーズ」とても上手になりました。この動きは背骨の柔軟さを育てます。他にも様々な動きがありますが、日々の遊びの中であまり動かさない部分を意図的に動かして全身運動を行っています。

さくら・さくらんぼリトミック

◎つき組（4歳児）

創立71周年記念事業で芝生になったグラウンドで、毎日マラソンや鬼ごっこ等を楽しんでいます。運動遊びが心の育ちや意欲の形成につながります。芝生の上に寝転んだり、雨上がりの濡れた芝生の感触を楽しんだり…。毎日が笑顔いっぱいのつき組の子どもたちです。

芝生のグラウンドうれしいな♪

◎ほし組（5歳児）

仲間作りを大切にしているほし組の運動会では、毎日心を合わせて練習してきた鼓隊で友だちとリズムや動きを合わせて息の合った演奏を見ていただきました。

団体競技では、チームの仲間と支え合って縄とび、馬とび、タイヤ引き、鉄棒をして手をつないでスキップをしてゴールをめざしました。馬とびは、馬になる人ととぶ人、お互いを信じないと跳べませんが、運動会までに全員がとべるようになりました。

運動会を通して、自分に自信を持ち、友だちの素敵なところもいっぱい見つけた子どもたち。これからますます素敵な仲間になっていきそうです!!

仲間と心をあわせて♡

◎わくわく子育て支援センター

わくわく子育て支援センターは、「出会い」「学び」「育ちあう」場として今年で25年目を迎えました。

毎月発行の広報誌を目にされたり他のお母さんから「楽しいよ」と聞いて初めて足を運んでくださった保護者の方は、緊張されながら日々家庭での子育ての様子を少しずつ話し始めてくださいます。子育ては24時間休みがありません。そんな中で頑張っているお母さんを労い話を聞いているうちに表情が和らぎ緊張が解

けていくのが傍にいて伝わってきます。「出会えてよかったぁ」と思える瞬間です。このような出会いに感謝しこれからも子育て親子の心の拠り所となり、地域の皆様に愛され、親しんでいただけるような交流の場にしていきたいと思います。

出会いを大切に

自立援助ホーム

鳥取フレンド 鳥取スマイル はればれ

繋ぐ

統括寮長　田村　崇

4月より3つ目の自立援助ホーム〝はればれ〟が開設され、自立援助ホーム部門が3ホーム体制となりました。そして新たに2人の仲間（スタッフ）も増え、総勢14名の個性豊かなスタッフに支えられながら、日々の生活を送っています。

若かりし頃のわたしは、〝誰もやらないのであればわたしがやる〟となんでも引き受けておきながら、でもどこか中途半端なことしかできない自分を悔しく思っていました。今は、あれもこれもやるということはないのですが、統括寮長という役割をいただき、今のわたしには何ができるだろうかと自問自答しながらの毎日を送っています。

そんななかでの気づきの一つとして、〝繋ぐ〟ということを考えるようになりました。人と人とを繋ぐこと。思いと思いを繋ぐこと。これが今わたしにできることではないだろうかと思っています。

人それぞれに個性があり、育った環境の違いがあり、考え方、趣味嗜好だって違います。そんな違いを認め合うところから始まります。綺麗事かも知れません。何かを決断する時、〝みんな同じ〟ということにはなかなかならないのですから。でもそこで諦めるわけにはいけません。そこでこの〝繋ぐ〟の役割が大切になってきます。

正直わたしは、人と接することがあまり得意ではありません。しかしここで逃げてしまっては、今までの〝中途半端〟からなんの進歩もありません。だからわたしは繋ぎます。優しさと尊敬の気持ちをもって、人と接していきます。大丈夫です。わたしには今、14名の仲間がいます。一人一人の素敵な個性と共に、この自立援助ホーム部門を引っ張っていけるよう努力していきたいと思います。

いつもみなさまに多大なるご支援をいただいていることを心より感謝しております。その思いをしっかりと繋げていけるよう頑張ります。今後ともよろしくお願いいたします。

新任職員の自己紹介

加藤神將

6月から自立援助ホームの職員になりました。夢だった事が実現し遂に新たな一歩を踏み出しましたが、日々勉強中です。既に悩んだりする事が沢山ありますが、「これでいいのだ！」をモットーに頑張っています。これは、どうしようもなく「自分はダメだ、これでいいのだろうか？」と思う事がある時に、前向きにさせてくれる言葉です。すべての事を「これでいいのだ！」と片付ける訳ではなく、自分の選択に後悔、悩まないよう、この言葉を胸に日々頑張っています。これからも沢山の後悔や悩む事があると思いますが、「これでいいのだ！」の精神で頑張っていきます。よろしくお願いします。長いって？「これでいいのだ！」

大熊英嵩

初めまして。この度9月から自立援助ホームで勤務をさせて頂いております。前職では保育士をしており、こどもたちと一緒に外に出て体を動かして遊んだことが良い思い出です。前職を辞めた後も、やはりこどもに関わる仕事がしたいという思いがあり、こちらの業界へ進みました。わからない事だらけですが、自分なりに頑張っていけたらと思っております。よろしくお願いします。

児童家庭支援センター
子ども家庭支援センター「希望館」

カップ麺をどう食べますか？

ソーシャルワーカー
山田美希

子ども家庭支援センター「希望館」に所属し、気づけば半年が経っていました。支援センターの業務にも少しずつ慣れてきていますが、まだまだ皆さんの力をお借りしながら勉強を行っている最中です。支援センターで勤務することが決まり説明を聞いたときに、印象に残っていることがあります。それは「たくさん想像してください」と言われたことです。想像するということは日頃からされていることと思いますが、いざ言葉で言われると想像するってどういうことなのだろうと、これまで意識したことがなかったと実感しました。そこから意識しながら想像することを始めました。

「カップ麺をどうやって食べますか？」そう質問されたことがあります。皆さんはどう答えますか？私は、まずカップラーメンを思い浮かべパッケージをはがしふたを開けて、お湯を注いで3分待って食べると答えました。答えは人それぞれです。お湯を注いで、時間通りに食べると答える人もいれば、時間より早く、または遅く食べると答える人それぞれおられると思います。食べることに必要な箸を用意するということを省略される人もあります。ではなぜ表示よりも早い時間に食べるのか遅く食べるのかきっとそこにはそれぞれ理由があると思います。その理由を想像していきます。また省略されることについても、想像しながら補っていくことは大切なことでもあります。

このようなことから、その人がその行動を選ぶその人らしい理由を想像していくことが私自身に求められていることなのだなと思いました。上記の話で例えると、私は相談面接の場面でカップ麺の食べ方を聴くことばかりに集中してしまい、なぜ早い時間で食べるのか、そのカップ麺のいいところはどこなのか、食べ方の工夫はあるのかなど深く話を聴くことが出来ていないことが多いです。後から、聴いておけばよかったなと思うことも多いです。理由にたどりつかない時もあります。まだまだ想像する力が足りていないなと反省することが多いですが、これからもっと聴く力を身に付けていきたいと思っています。想像するということは簡単なようで難しいようにも感じますが、想像を絶えずしていくことでその人の理解に繋がると思います。これからも色々想像を膨らませながら、今後の支援に繋げていくことができればいいなと思います。まだまだ勉強途中ではありますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

※家族・子育てについての悩みや、子どもに関するあらゆる相談に応じています。

相談料は無料です。

○電話相談

月曜日～金曜日　朝8時30分～夜12時

（緊急の場合は、休日・祝日・時間外も24時間対応）

○来所相談

月曜日～金曜日

朝8時30分～夕方5時30分

専門の相談員が対応します。

就労自立支援事業
はまむら作業所エミライズ

たくさんの先生と出逢い

はまむら作業所
管理者　山岡宏樹

私には、はまむら作業所の仲間と日々共に活動する中で、たくさんの「先生」が開設当初よりたくさんいます。今、考えて思い出してみるだけでも、…農作業の先生、障がい福祉分野の実践者の先生、児童福祉分野の事を教えて下さる現場の先生、相談する事の大事さを教えて下さる先生、地域で生活する事をそれとなく教えて下さる先生、毎日をぼちぼち生きるという事の大事さを教えてくださる先生など、たくさんの「先生」と出会い続けています。先生方は、特に学校や研修のような形でなくても、日々一緒に活動する仲間やそばに居て、「なるほどなあ、それはわからなかった。」と発見や気付きをくれます。そして先生は、時に厳しく時に優しく、当たり前の事、決して特

別な事でない事もわかるように言葉や表情、行動で私に愛情をもっていろいろと学びを下さっています。

先日、とあるはまむら作業所の利用者さんと軽作業を地域で一緒にしており、何となく共感できた事があります。その軽作業は決して楽ではなく、短時間でしたが、何だかほっとする自分、もうちょっと頑張ろうと思える自分、どうしたらもっと上手く作業できるのだろうかと、もがく自分などがそこにいました。軽作業現場での先生の指導は、大きな機械の音で私達に言葉での指導は少なかったのですが、身振り手振り、視線を含め、私達に次の行動をわかるように伝えてくれました。先生は年齢的にもだいぶ人生の先輩という事もあったのですが、無駄もない上に、シンプルかつソフトな次々の行動に仲間と共に引き込まれ、あっという間に私達の作業を終えさせてくれていました。身体的な疲労感こそ多少ありましたが、何だかすがすがしい感覚と、「すごいなあ」という雰囲気を感じる時間でした。普段の活動の中にある、でも気付きにくい感覚を共感できた貴重な時間だったように思います。

うまく表現できませんが、日々生活する、活動するとても近くにも「先生」がいる事がとてもありがたい事、不安な時、次どうしていくのだろうと悩んだ時、そばでヒントを与えて下さる先生がいる事を伝えたいです。コロナ禍を理由にはしたくありませんが、「どうして私達は働くのだろう」「何故そこまでする必要があるのだろう」「私はこれから何をどうしたらよいのだろう」など、どこかすっとしない日々を感じていました。それを前進させてもらえる感覚を、とても身近な所で学び、前向きに1日の活動を進めていこうと知った時間だったように思います。

私達はこれからもいろんな「先生」との出逢いを大事に、1つずつ形にしながら、学びながらはまむら作業所の仲間達と毎日を過ごしていきます。今日も一日よろしくお願いします。

一年を振り返って

エミライズ
所長補佐　北農佳苗

エミライズが開所して1年が経ちました。この期間に継続的に利用頂いた方はのべ18名、就職決定された方は4名になります。エミライズは障がいのある方が一般就労を希望される際に、基本的には2年間という限られた期間の中で一人ひとりに合った職場に就職できるようお手伝いをする就労移行支援事業所になります。

エミライズの特徴としては利用者さんのニーズに合わせたメニュー設定をしていく『100％オーダーメイド支援』、そして必要な方には『個別支援』をしていることです。一人ひとりに担当スタッフがつき、継続的に相談していく体制を作っています。現在、利用者さんの内訳としては年齢は10代～60代まで各年代おられますが、20代が最も多く全体の50％を占めています。

一人ひとりに合った職業マッチングをしていくために、〝職業理解〟と〝自己理解（障がい理解）〟を重視しています。職業理解を促進するためには、気になる企業や職種があればスタッフ同行の元で職場見学や職場体験（1日～短期間）、職場実習（5日～2週間程度）を実施しています。実習後の振り返りではご自身の得意なことや苦手なことを整理し、また苦手なことに関してはどのようなサポートがあると取り組めるかをスタッフと一緒に考えていきます。この取り組みを繰り返していくことで、自己理解を促進させ、就職面接での自己PRや配慮してほしいことの明確化に繋がっていきます。

職場体験や実習の中で、企業の方から直接「作業が丁寧ですね」「パソコンのスピードが速いですね」等などのプラスのフィードバックを頂いた時、その言葉は利用者さんにとって大きな糧となり、実感を持った自信に繋がっていくことを感じてきました。その体験を土台として、自分自身を肯定的に捉えられるようになり、本来持っておられる良さに気づき、輝きを増していかれる姿を見てきました。

これまでの就職決定者もこの職場見学・体験・実習の過程を経ながら、自信をつけてステップアップされました。そして9月は嬉しいことに3名の就職決定者がありました。これまでの就職決定者に関しては、利用期間は平均6・25カ月と意外に短いことが特徴です。『100％オーダーメイド支援』を担当制で行うことにより、密度の濃い支援になっているのではないか?と感じています。

利用者さんのニーズに応え続けていくためには、スタッフの日々の自己研鑽が欠かせません。利用者さんと共に成長し

ていけるようスキルアップしながら、これからもスタッフ皆で力を合わせて取り組んでいきたいと思います。

秋の大山

診療所

こころの発達クリニック

熱い、厚い二人の施設長

医師　川口孝一

「最近の若いもんは…。」と言う言葉は、いつの時代にもあり、ソクラテスの書き残した物の中にもあるようです。こどもは今の時代に生き、今の時代の環境に合わせて成長しています。我々大人は過去の時代の環境に合わせて成長し既に出来上がっています。勿論大人も今の時代の環境に合わせようともがいてはいますが、こどもたちには敵いません。

組織もまた生き物です。成長進化しています（勿論後退することも）。我々の鳥取こども学園も、今年度春に大きな世代交代が行われました。新しい園長、館長が生まれました。この二人のキャラについて簡単にご紹介させて頂きます（あくまでも私見ですが）。

先ずは藤野謙一園長です。藤野興一理事長の血を引くサラブレッドです。しかしサラブレッドとは言っても決して競走馬の様に保護的環境下で育った訳ではなく、非凡な生活環境の中（特に幼少期）で鍛えられて育っています。理事長は労働運動を経て学園に戻って来ましたが、園長は一般企業の開発エンジニアを経て学園に戻ってきました。園長は「踊る大捜査線」の織田裕二さんに似ていて、理事長に負けず劣らず熱血ですが、理事長が学生運動労働運動調で語るのに対し、園長は企業のプレゼン調に簡潔に分かりやすく語ります。しかし園長も行政等に対しては、「事件は会議室で起きてるんじゃない」と吠えそうになります。常にこどもの側に居て、こども目線を決して忘れません。ある時、「謙一さんはもう園長としてやれる」と、何があった訳でもなく、ふとそう思ったことがあり、それを謙一さんに言うと、謙一さんは目頭を押さえました。涙腺が弱い純粋な信頼出来る奴なのです。『今』という土俵の上では、既に理事長を超えたと私は思っています。

次に水野壮一館長です。イメージとしては、強く優しく皆んなを守る「劇場版ドラえもん」のジャイアンです（むかーしクリスマス祝会の職員劇で館長が演じたバカボンのパパのイメージも強いのですが）。館長も園長同様現場叩き上げです。自身が現場の大変さを肌で体験しているので、現場職員への気配りも忘れません。私にも随分気を遣ってくれます。（学園職員としては珍しく）この学園便りの私の拙い文も毎回読んでくれている様ですし、私が言った事も自身の話の中に引用してくれます。稀有でありがたい存在です。こどもたちにも、私には照れ臭くてとても言えないセリフを投げかけます。演じてではなくマジで言えるこれまた純粋な奴です。文字通り身体を張ってこどもたちを受け止める力強さがあります。

安心してください。二人とも、こどもたちと伴に歩みつつ、こどもたちのためなら、保身に走ることなく身体を張れる命を懸けることができる男たちです。

二人の紹介をさせてもらったところでもう一言。同僚だった人が「長」になる事にはメリット・デメリットがある様に思います。遠慮せず何でも言える、相談し易いと言うメリットもありますが、友達親子の様に節度、境界を持ち難いと言うデメリットもある様に思います（かく言う私も、この文章の中で、お二人を「奴」と言ってしまってます）。実は「長」たる者として「重責を負う」というのは、大変なストレスなのです。以前勤めていた病院で、定年退職前の心身共にヘロヘロになっておられた看護師長さんが、退職され再任用で一般の看護師さんになられた途端、若返られる姿をたくさん見てきました。「長」と言うストレスは半端ないんだと思いました。

話が逸れましたが、私もですが（特に怖いもの知らずの私かも）我々職員は、

長を『長』として敬う気持ちを忘れずに二人を支え（二人がレジェンド藤野興一理事長の様に『鶴の一声』が発動出来る存在になるまで）、こどもたちと伴に歩んで行かなければならないと思います。

鳥取養育研究所

学園資料の整理・保存からルーツを学ぶ会へ

～学園の歴史を掘り起こす～

佛教大学
小池　桂

早いもので私が学園と関わりを持つようになってから14年になる。当時、私は鳥取県の社会福祉史に関する資料を探しており、ある方を介して、鳥取こども学園に資料が残っていることを知った。そこで資料整理をさせていただきたいと申し入れ、一方で学園の方もその必要性を感じており、ここに資料の整理・保存活動が始まることになる。2008年8月のことであった。活動は年2回、ほぼ定期的に行われ2015年頃に終わった。整理された資料は、一点一点、その内容をカードに記録するとともにデジカメでも撮影し、保存されることとなった。

こうして資料の整理・保存活動は終わるが、これで終わりとせずに、整理された資料を生かそうということになり、そこで始まったのが学園のルーツを学ぶ会である。2016年8月に第1回学習会があり、その後、18回にわたって学園の歴史について学習会を積み重ねてきた。その過程で学習の成果報告として、学園職員の皆さんを対象にした報告会も2回行った。第1回目は2018年8月に開催され、明治、大正、昭和初期における学園の福祉実践などが報告された。第2回目は今年9月にあり、昭和期、特に戦時下の児童福祉の全体状況をふまえ、学園の福祉実践や、鳥取県庁近くにあった学園の現在地への移設の経緯、施設長の実践家としての苦悩といったテーマについて報告がなされた。

こうした取り組みの中でルーツを学ぶ会で目指してきたことは、この会が学園のための、学園で実践を営む人々のための会でなければならない、という点である。福祉実践に携わる職員の皆さんにとって、日々、悩みは尽きないと思われる。そのような皆さんにとって展望を開けるような、そういう会にしなければならない。

最後に。資料整理と保存活動も含め、この14年の取り組みには特筆すべきことがある。それは職員の皆さんの積極的姿勢である。ともすれば資料整理や保存、あるいはルーツを学ぶ会のような学習会は研究者が主導して行い、研究者のための取り組みになりがちであるが、学園では職員と研究者とが協働して進めてきた。この14年間の宝である。今後もこの宝を大切にして取り組んでいきたい。

鳥取県里親養育包括支援事業
里親支援とっとり

5つのワーキンググループ

所長　遠藤信彦

さまざまな事情で、自分の家庭で暮らすことのできない子どもは、地域において家庭的な雰囲気の中で育つことが望まれます。里親家庭はその最たるものです。子どもは、ずっと同じ養育者に見守られて暮らすことで、この人たちは信頼するに足り得て、自分は存在してよく、この世界は良いところだと感じることができます。里親家族や近所の方の、赤ちゃんが生まれ成長し、社会に出て働き、伴侶を得て子を育て、老いて病に伏せり死んでいくといったライフステージを目の当たりにすることで、自分の将来を思い描くことができます。

しかし、公的な子育てを地域のひと家庭において行うことには、課題もあります。

コンプライアンスの確認が必要です。鳥取県が里親に子どもの預かりをお願いすることは、『委託措置』といい、鳥取県が責任をもってこう決めましたよという強いことばです。これを受けて、預かる里親にもコンプライアンス（法律、制度他、その立場において守るべきことを守ること）の徹底が求められます。加えて、子どもがどんな自分になりたくて、まわりがどう支えていくかという計画にそって子育てをする必要があります。しかし、一日も早く落ち着いた暮らしを提

供したいがために、児童相談所による計画と確認がおろそかになってしまうことがあります。

　また、里親制度が一般の方に正しく知られていません。制度の講義を聞いた方から「もっと暗いもの、触れてはいけない話題だと思っていた」という感想を聞くことがあります。人間が労働力としてしか評価されなかった戦中戦後の時代に、子どもが米俵一俵と交換されることがあった、といったような歴史のイメージが、いまだに根強く残っているといいます。現代日本の養護の分野は、子どもの最善の利益を追求しているということを知ってもらう必要があります。

　また、里親子が「続きがら」にとまどうことがあります。市役所などで書類を書くとき、あるときは「委託児童」あるときは「同居人」あるときは「扶養家族」と扱われます。便宜上、里親の名字で生活していても、病院の窓口では本名で呼ばれます。こういったことをあらかじめ知っておく必要があります。

　また、社会に貢献しようと、意気揚々と里親登録しても、何も話が無ければやる気が萎えてしまいます。子どもを預かるまでの待機の期間に、どういったトレーニングを行うべきか、問われています。

　これらの課題について、里親と施設、児童相談所の三位一体で、5つに分かれて考えるワーキンググループを作りました。コロナ禍で分断され鳴りをひそめていた民間と行政の協働が、息を吹き返しました。メンバーの里親は「里親子が、立場にとまどったり不便な思いをせず、地域に支えられ、ごく自然に暮らせるようになってほしい」と語ります。この理想に向けて尽力します。

事業所内保育施設
とりっこらんど

だいすきパワー

チーム長・保育士
田中微美

保「おやつの時間だよ～」子「いやー」保「トイレに行こうね～」子「まだ遊びたい！」保「先生もお片付け手伝うよ」子「いや～（自分で）する！」保「（どんな声かけがいいのかな…？）」

　イヤイヤ期真っ只中の子どもたちに翻弄される日々を送るとりっこらんど保育士の田中です。4月に育休明けで復帰した私は、すぐにイヤイヤ期の洗礼を受けました（笑）

　イヤイヤ期は、自我の芽生え、自己主張が始まる大切な時期です。私が最初に子どもと関わる上で心がけたことは、子どものペースを見守り、子どもと遊びを共有し、気持ちに寄り添うことです。また、子ども一人ひとりの好きなものを知ることです。私は次第に、子どもの大好きなショベルカーになりきって一緒にトイレに行ってみたり、「車さん、おやつに行ってくるね～」「待ってるよ～」と一人で何役もします。子どもたちも、覚えたフレーズを自分なりに使い、「〇〇ちゃんおやつだよ～」「〇〇せんせい！おもちゃさんとバイバイ(片付け)した～！」と知らせる等、日々成長する姿に感動します。子どもたちと好きなもの（ひと）とのつながりは強く、愛は大きいです♡

　この時期の子どもにとって、耳にするもの目にするもの全てが新鮮で刺激的なことです。手洗い場で水遊びをはじめたり、おもちゃと一緒に散歩へ行こうとしたり、好きが強すぎて友だちを力いっぱい抱きしめて泣かれたり…。大人の私たちには、時にはなんでそうなるの？？と思うことがたくさん起こります。しかし、子どもの行動ひとつひとつがごく自然な姿で、成長しているときだと受け止めながら、子どもたちを援助していきたいと思います。

　これからも自立への一歩を温かく見守り、子どもたちの身近な援助者として、私も子どものだいすきな存在でありたいと思います。

当学園事業へのご寄付 後援会へのご加入に 感謝申し上げます。

前回報告以降、現在まで、ご寄付いただいた方々、後援会に賛同（会費納入）していただいた方々は、下記のとおりです。
心より感謝し、ご報告申し上げます。

寄付者（R４．５．８～R４.11．９）

敬称略

氏名	氏名	氏名	氏名
鳥取県教職員組合東部支部	岡本博和	岸田洋子	竹下敏子
(医)みやもと産婦人科医院 宮本直隆	小川尚美	喜多寿美	竹田江海子
(特非) Living in Peace	尾田一壽	北室育子	武安泰雄
秋崎るり子	下石洋子	木下尚則	唯聡太
浅野和子	海藤ひろみ	公平鈴子	田中昶
阿部正昭	懸樋宮子	木村和子	田中嘉鶴子
石倉洋子	柏女霊峰	木本裕治	田中和子
石谷充	片倉夏実	草野雅昭	田中耕自
いしど歯科クリニック	勝原雅人	蔵本美知子	田中俊道
磯田教子	加藤礼二	光田澄子	谷垣由紀恵
伊田美可子	金森千恵子	高力房枝	谷口香与子
市谷成子	㈱清水	小竹原寛	タニグチ・ヘア・サロン 谷口義明
伊藤邦子	㈱信勝丸漁業 代表取締役 山岡寛人	小橋房子	谷島伸二
伊藤文代	㈱トータルエナジーオオタ 代表取締役 太田栄市	米谷食品センター	田村明子
井上康夫	㈱戸信	斎藤禎一	田村昇
入江順子	㈱丸十	齋藤基	田村裕子
(医)さとに田園クリニック 理事長 太田匡彦	㈱ヤマネ機材 代表取締役 山根克仁	西伯更生保護女性会 会長 石敬子	田村興産 田村美好
(医)みなみ歯科医院	㈱アベ鳥取堂	坂根政代	常井幹生
(医)きむら耳鼻咽喉科医院 理事長 木村寛	㈱ウィードメディカル 代表取締役 林誠	酒巻佐代子	鳥取あおぞら法律事務所 瀬古智昭
(医)乾医院	㈱コタニ 代表取締役 小谷憲司	佐藤徹	鳥取医療器㈱ 代表取締役 玉木淳二
(医)萩原医院	㈱保健企画 ひまわり薬局	澤田孝義	鳥取鶏卵販売㈱ 代表取締役 長田淳
岩田美代子	㈱ミナミコーポレーション 代表取締役 岡本安量	柴田和仁	鳥取市仏教会
上田健司	㈱鳥取銀行	柴田妙	鳥取トヨペット㈱
植田望	神谷夏子	柴田隆嗣	鳥取東更生保護女性会 上山弘子
上田浩晶	亀本良一	芝生化プロジェクトチャリティ募金	鳥取南更生保護女性会 会長 山田曠恵
江谷孝明	川口明子	樹林舎 山田恭幹	鳥山玲子
大谷恭一	川口正男	杉村英子	中川節夫
大塚福子	河妹宏太	杉森忠篤	中嶋哲一
大前幸正、啓子	菊池みつえ	砂川晋治、真理	中原照子
大森琴世		勢木宇太郎	
岡田公則		綜合印刷出版㈱	
岡本智鶴子		田賀由美子	
		竹内亮	
		竹下努	

氏名	氏名	氏名	氏名
中村匡子	広谷笑子	安本良栄	天徳寺
中本久美子	福寿みどり	山下孝子	佐野信三
中山健二	福田眞	山田敏明	㈱岩田兼商店
西浦公子	藤井重明	山田金庫店　山田弘	吉成寺
西尾美智子	藤井喜臣	山名祐子	(福)鳥取市社会福祉協議会
日海通信工業㈱	藤原毅芳	山本智丈	サンユー技研工業㈱
信原修	藤原雅夫	山本直美	西村照子
畑山博史	古川公広	㈲岩田小型運送	上嶋純子
花木正史	古川潤一	㈲柏木電器	米子信愛鍼治療院
濱橋寿一	前田悦子	㈲岸田ガラス店 代表取締役　岸田賢伸	尾崎歯科クリニック 尾崎紀之
濱本五十鈴	巻田豊		
濱本義則	眞鍋裕亮	㈲造園土木植清園 大塚巌	井上裕子
林有希	三木康二		中原琴美
はやし社会保険労務士事務所 林義雄	三国山の風の館 代表　西上洋治	㈲谷口　谷口肇	鳥取更生保護女性会 会長　邨上眞由美
		㈲山本ハウス工業	
綱島健之	水野浩伸	吉田由美子	ヤマダヤスキ
原雅子	村上悦子	米谷令子	池尾真理
原井たき代	村上収	リセット　溝口智子	(福)あすなろ会
パルス電工㈲ 清水守	村中良子	龍福寺	㈱マツワ
	持末邦子	若桜柿坂医院 柿坂紀武	冨山佳代
悲眼院　高橋昌文	森田元章		無名氏

物品寄付者　(R 4. 5.13～R 4.11. 9)

敬称略

氏名	氏名	氏名	氏名
BALL PARK 代表　谷尾勝利	㈱ブレッシングス	中山晴雄	山本紗由美
	㈱ヤマネ機材	野田徹	山本真吾、智子
UFO　秋里	河本準一	橋本真紀子	㈲創建 代表取締役　佐々木一幸
UFO　扇町	三和商事㈱ 松村有格	花原孝子	
UFO　吉方		林昭男	岩浪敏之
上山弘子	信夫君代	林澄子	山本範久
江崎グリコ㈱ 第1S部(冷凍)	清水由紀子	半田卓実	中嶋隆裕
	食卓クラブ	福田養蜂場	田中仲雄
荻原律雄	棚田栄一	本光寺	米田正雄
尾田一壽	谷口隆之	前嶋大輔	鳥取更生保護女性会
加藤和徳	谷口勝	松下暢子	五百川洋
金森興太郎	中四国アイスクリーム協会	松永隆夫	日本画グループ鳥 白岡文江
㈱ヤマネ機材 代表取締役　山根克仁	テスタ	森山明	
	土井倫子	安本芳子	加藤貴代美
㈱フレーベル館 メディア事業部CSチーム	徳田商店	柳田次郎	永泉寺
	中村敦司	山田悦子	無名氏

法人本部よりお知らせ

１．社会福祉法人鳥取こども学園は、様々なツールで情報発信をしております。

⑴　法人ホームページ　https://www.tottorikodomogakuen.or.jp/

⑵　facebook　①　法人facebook　https://www.facebook.com/toriko01

②　認定こども園　鳥取みどり園　https://www.facebook.com/tottorimidorien

③　事業所内保育施設　とりっこらんど　https://www.facebook.com/torikkoland1941

④　就労移行支援事業所　エミライズ　https://www.facebook.com/emirisetoriko

⑶　note　https://note.com/tottori_kodomo

法人、施設、事業所の様々な情報をこの３つのツールをリンクさせながらお伝えしておりますので、是非ご覧ください。

法人 facebook　　法人ＨＰ　　法人 note

２．オンライン寄付募集サービスについて

⑴　『Syncable』

https://syncable.biz/associate/toriko01/

⑵　ブランド品買取サービス「ブランディア」と寄付プラットフォーム「Syncable」が共同で運営するBrandPledge（ブランドプレッジ）のページも用意しております。送られてくるダンボールに洋服やブランド品を詰めて送り返すと査定額からご寄付いただけます。

https://brand-pledge.jp/associate/toriko01

その他、詳しくは『鳥取こども学園のご支援・ご寄付をお願いしております』ページをご覧ください。(ページ上部に様々なご寄付の方法を掲載しております)

https://tottorikodomogakuen.amebaownd.com/

ご寄付と併せて、facebookやtwitterのアカウントをお持ちの皆様は是非「シェア」していただくとありがたいです。

私たち社会福祉法人鳥取こども学園がさらに歩みを続け、私たちの施設で出会った子どもたち、これから出会う子どもたちへの途切れることのない応援とご寄付をお願いいたします。

法人 Syncable サイト　　鳥取こども学園のご支援・ご寄付をお願いしておりますサイト　　法人 BrandPledge サイト

●従前どおり銀行口座へのご寄付は、下記へお願いします

法人本部：〒680-0061 鳥取市立川町５丁目417番地　鳥取こども学園内
TEL 0857－22－4206　FAX 0857－23－0242

振込口座：郵便振替　０１４９０－９－９１０６
鳥取銀行本店営業部　普通預金　７６４５６１１
山陰合同銀行鳥取営業部　普通預金　３４２２８１２

口座名義：社会福祉法人鳥取こども学園　理事長　藤　野　興　一

※なお、郵便振替は寄付金・後援会費共通口座となっておりますので、寄付金・後援会会費のどちらかに〇をしてご入金ください。

●後援会会費は下記へお願いします

振込口座：鳥取銀行本店営業部　普通預金　０４０５９７０

口座名義：鳥取こども学園後援会　会長　村　上　亜由美

【お願い】

この「学園だより」は、当法人にご理解、ご協力いただいている皆さまに、施設での出来事、様子等を報告する意味で発刊しています。
同封しています寄付金・会費の振込み用紙は、あくまでも皆さまの便宜を考えてのことですので、ご理解いただきますようお願い致します。
今後とも、当法人を温かく見守って下さいますよう、心よりお願い申し上げます。